

『幕末時代における技術と公論—横井小楠を中心に〈命・自然・社会〉』

David Labus

(チェコ共和国 カレル大学 哲学部東アジア研究所 日本研究学科)

要旨

幕末時代は、様々な現象やモチーフの接点として興味深い資料や見方を提供し、全世界で連発するいろいろな危機に直面する現代社会を考える上で、今なお示唆に富むテーマになっています。例えば「それぞれのエリートの社会的な責任感」、あるいは「情報の重要性におけるヒエラルキー作りの能力」といった観点から見れば、150年以上の距離があってもなお、幕末と現代との比較は可能であると思われま

す。今回の発表では、「技術のとらえ方の変容」を枠に、当時の知識人における周辺世界の認知モデルを考えたいと考えています。単に伝統的な「西洋からの技術受容」ではなく、朱子学的な価値観を念頭におきながら、どれだけ広範囲かつ柔軟にそのモデルを見直せたか、という一考察です。また、「技術」においても、富国強兵の方針に沿った物理的な技術でも、思想そのものについての「技術的な」アプローチも含めています。